参考資料Ⅰ

市内好事例・先進事例

第3次計画に掲載する事例の候補一覧です。

【1】については掲載予定であり、【2】～【9】については、現時点で項目のみの紹介ですが、掲載することになった場合は、【1】と同程度に更に内容を深める予定です。

【1】「ワクワク!! おいかみチャレンジ」まちづくり協議会×市民公益活動団体

老上まちづくり協議会×JAGUAR の部屋

＜概要＞

まちづくりの担い手不足や、世代間、新旧住民のコミュニケーション不足、若い世代や新住民の地域まちづくりへの参加に対する関心や意欲の不足といった地域の課題を持つ老上まちづくり協議会が、市の「地域課題解決交付金」を活用し行った取組であり、市民公益活動団体の JAGUAR の部屋と協働で実施されたハロウィンの仮装行列イベント。

事業団からの助言をもとに、学区版の「ひとまちキラリ」（採択方式による市民公益活動の助成事業）として、「ワクワク！！おいかみチャレンジ」を実施することとし、要項設置と審査員（深川・栗田・山本会長）の選定を行った。

＜目的＞

独居老人等、社会的に孤立している人に訪問することを目的とし、仮装をした子供たちと老上学区を練り歩き、トリックオアトリートで交流を行った。

・JAGUAR の部屋の周知　月に 1 度実施している子ども食堂および協力者である立命館大学 meRci（2023 年 3 月に開催した「おいしい老上おむすびパーティー」をきっかけに参画）によりおむすびが振舞われた。

・地域共生社会を目指し、やわらぎ苑等の老人ホームでは、お菓子ボックスの作成を依頼した。

・プリムタウンなどを歩き、玄関先でお菓子をもらうことで、緊急時に地域の家に助けを求めることができるというきっかけを与えた。

・保護者同士の交流により、世代間、新旧住民のコミュニケーションを促進した。

＜その他の採択事業＞

・ワンワンパトロール

・ふれあい農業合校

＜事業の結果＞

結果として、助成金5万円で350人の参加者があり、世代間、新旧住民のコミュニケーションの促進および、若い世代や新住民の地域まちづくりへの参加のきっかけを創出することができた。

＜ここがポイント＞

まちづくり協議会が中間支援組織のような役割を担い、公募提案方式の助成事業を実施することにより、地域で活動する市民公益活動団体をエンパワメントし、まちづくり協議会だけではできない地域の課題解決に向けたイベントを開催することができた。

【2】子育て応援フェスタ　市民公益活動団体×市

市主催のラウンドテーブル・マッチングテーブルをきっかけに誕生した協働事業であり、子育て支援を行う市民公益活動団体まちのコミュニティハブ　ツナグと市の協働により実施された。

当日はその他の市民公益活動団体も集まり、子育てに関するワークショップやマルシェが行われた。

【3】やまだメロンまつり　まちづくり協議会×市民×教育機関

2022 年から開催されているイベントであり、山田の未来を考える若手ワークショップをきっかけに誕生した「ヤマミラ」がイベントの主軸となり、地域のブランド化を目指し取り組んでいる。

当日は立命館大学の学生団体 BohNo をはじめ、地元企業の協力のもと、名産であるメロンを使用した様々な食べ物が販売された。

【4】玉川 LINE プロジェクト　まちづくり協議会×教育機関×中間支援組織

立命館大学で実施されているシチズンシップ・スタディーズによる学生の草津市コミュニティ事業団へのインターンシップの一環として行われる、大学生のまち活応援プロジェクト（まちづくり協議会×学生のマッチング会）により学生と玉川まちづくり協議会がつながり、誕生した事業。

立命館大学生をはじめ、区域に暮らす若い世代に玉川の情報を届けたいと、立命館大学の学生が玉川学区公式 LINE の立ち上げおよびキャラクター（はぎたま）の作成を行った。

（矢倉学区では、マッチングした大学生がふれあいまつり実行委員会に参画し、当日の司会進行を務めた。）

【5】志津を楽しくする 100 のプロジェクト　まちづくり協議会×中間支援組織

令和3年度より部会制ではなくプロジェクト制を採用している志津まちづくり協議会であったが、移行後プロジェクトが集まらないという課題を抱えていたところ、草津市コミュニティ事業団からまちづくりスポット大津で活躍する北井氏を紹介されたことから発生したプロジェクト。

楽座プロジェクトでは、志津のスポットをウォーキングで探す「第1回志津みっけ！」が開催され、公式LINEを作成し参加者のミッション管理を行うなど、工夫に富んだ事業が実施された。

また、福祉プロジェクトのぷらっと茶屋等、学区内に住む市民が自分のやりたい分野に参画し、主体的に事業が実施されている。

【6】アドベントカレンダープロジェクト（学生団体滋賀ログ）　教育機関×中間支援組織

地元民に地元の魅力を届けるため、主に Instagram で活動する大学院生の2人組の滋賀ログにより、滋賀の魅力がぎゅっと詰まったアドベントカレンダー（草津市はクリスマスブーツ発祥の地）が作成された。

アドベントカレンダーの作成にあたり、コミュニティ事業団に相談をしたところ、草津商工会議所を通じて印刷会社の紹介や、Feel→do への参画の提案がなされた。

Feel→do では実際にプロジェクトメンバー4人が加わることとなり、クラウドファンディング（長浜市地域おこし協力隊　植田淳平をキャンプファイヤキュレーターとした。）を実施し、無事アドベントカレンダーを作成することができた。（クラウドファンディング結果　1387千円／1500千円）

【7】チャレンジ!!オープンガバナンス（COG） 市×中間支援組織×教育機関

行政の持つデータや経験を活用し、市民や学生が地域課題を解決するコンテストである「チャレンジ!!オープンガバナンス」において、市の提示する課題解決の提案を行うワークショップが市、草津市コミュニティ事業団、立命館大学の協働により実施された。（学生団体「ぼらんて草津」誕生）

【8】のじのじカフェフードバンク 基礎的コミュニティ×教育機関

立命館大学経済学部　佐藤　卓利　教授の発案により始まった事業であり、野路町内会と町内に住む市民がコロナ禍における一人暮らしの学生の一助になればと、お米屋野菜といった食料品や日用品を無償で提供する取組。

令和3年3月に第1回が実施され、現在も継続中である。

コロナ禍の学生の生活の支えとなるとともに、学生が地域と関わるきっかけとなっている。

【9】有償ボランティアによる「広報くさつ」配布合理化 まちづくり協議会×市民

平成29年、志津南学区まちづくり協議会が「志津南まちづくりセンター」の指定管理者に選定されたのを機に、コミュニティビジネスとして若草・岡本西地区協働活動委員会（旧自治連合会）が当地区の高齢化が進むなか、役員の担い手不足や負担軽減を目的に、9 町内会が協働して「広報くさつ」の一括処理を検討し、行政事務委託費の大半を占める「広報くさつ」の合理的に簡素化するシステムを 9 町内会に提案、全住民の合意のもと実現可能となった。

従来では、配送業者は 9 町内会長宅に届けられ、会長は班長宅に仕分けし班長宅に届け、班長は 20 軒近い会員宅 に配布していたが、新システムでは、9町内会の配布物を全てまちづくりセンターに納品し、3名の有償ボランティアによって各町内会の各会員に配布している。

＜新システムのメリット＞

1. 配送業者は 9 町内会分を一括まちづくりセンターに納品することで配送時間の大幅な短縮が図れる。
2. 町内会長や班長は一切の全戸配布物に手を触れることがなくなった。
3. 担当者は約 150 軒から 400 軒の会員宅に配布することで空き家や留守宅を把握することで町内会とのコミュニケーションを図り、防犯活動や独り住まいの高齢者の見守りにも効果を発揮し、若干の報酬を得ている。